

幼児の言葉の記録

「聞いたかった！」の実践より

国広 勝代

一 はじめに

幼児教育の現場では、子どもたちの楽しい会話、自己主張する言葉、感嘆の声などが飛び交っています。保育者はそれらの言葉を聞いて、幼児の考えや心情を受け止め、いっしょに笑ったり、喜んだり、心の中で励ましたりしながら幼児とともに生活して

います。

この時期は幼児が人間として成長していく大切な過程であり、我々は子どもの様々な表現を認め、育んでいこうとしています。そのひとつに言葉があります。幼児がみずみずしい感性で受け止めたことを幼児自身の言葉で表現することを大切にし、幼児がたどたどしい言葉で一生涯命伝えようとする姿を温

かく見守り、耳を傾けるといふ環境が子どもの成長にとって大変重要だと考えています。

そこで、園と家庭との連携によって、よりよい言語環境を作り上げていくために、本園では「聞いてしまった!」という活動を実施しています。

二 実践にあたって

活動にあたっては「聞いてしまった!」用紙を作成し、家庭に配布しました。その用紙に家族が聞いた幼児の楽しい会話などを記録し、聞いた人の感想をそえて、幼稚園に提出(本園では提出箱を作り、これを「聞いてしまったポスト」とした)してもらっています。これは親の主體的な活動として投げかけており、強制はしていませんが、この記録が幼児の成長の証として貴重な財産になることを理解していただいております。

記録内容は次のとおりです。

◎「聞いてしまった!」の記録事項について

一枚の紙(B5判)の記録事項は、日時、天候、場所、幼児氏名、聞いた人、聞いた言葉、聞いた人の一言、という項目で成り立っています。

日時、天候、場所については、その場にいない教師が幼児の言葉を理解する手がかりとして、また、時間が経過した際も言葉をいきいきとさせるために必要と考えました。

聞いた人の一言は幼児の言葉のどんなところに魅力を感じて記録しているのか、親の関心がよく把握できると考えたからです。

三 記録された幼児の言葉について

提出された「聞いてしまった!」の内容から記録者の興味や関心がどのようなどころにあるのかを調べてみると、大きく二つの側面があるように思われれました。

そのひとつは子どもの言葉の表現方法そのものへの関心であり、もうひとつは言葉の背景にある幼児の姿や心情への関心といふことができます。

言葉の表現方法そのものについては、更にその内容が(1)同音異義の表現 (2)比喩の表現 (3)因果関係の表現 (4)文法的な誤りや言葉の意味の認識の違いから起こる表現 などに分けられました。

言葉の背景にある幼児の姿や心情については、聞いた人の興味・関心が感情的であり、個人的な価値基準による場合が多いのでまとめるのは難しいことです。 (5)大人の言葉を模倣している場合 (6)幼児の成長発達に喜びを感じた場合 (7)愛他心の育ちをうれしく思った場合 (8)幼児の発想や行動に感心した場合 などを上げることができます。この類の記録は家族だからこそ採取された言葉のように思われます。

それぞれについて例を上げてみると次のようなものがあります。

(1) 同音異義の表現

— 四歳 男児 —

車の中から犬を二匹散歩させている人を見て

子「あつ いぬが二人だ」

母「ん？ 犬は二人でなくて二匹って言うんよ」

子「ふーん」「じゃ牛は？」

母「一とう 二とう つかぞえるんよ」

子「それはうんどうかいでしょう」

《聞いた人の一言》母

なるほど、一等・二等もあるもんなー、と感心させられる。子どもの経験が一つ一つ知識として積み重ねられているんでしょね。

(2) 比喩の表現

— 五歳 女児 —

こどもずかんを一人で見ていました。

「からだ」のページで「たべものゆくえ」というところで

子「おなかの中って迷路みたいだね」

私はなんのこともわからず、本を見るとイラストでわかりやすく体の中のことが書いてありました。

母「ほんとうだね」

子「この前、私がおなかが痛かったとき、食べ物がおなかをまわがえてゴールまでいかなかったんだね きつと……」

母「そうだね いつもゴールまでまわがわれないといだね」

《聞いた人の一言》母

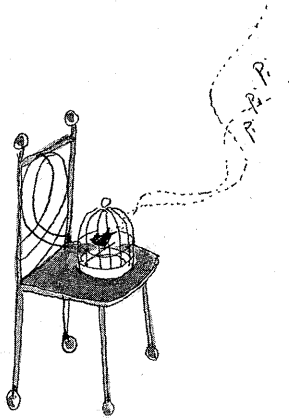
食物が口から入って排泄までを迷路とは。でも、なるほどなと驚きです。

(3) 因果関係の表現

—三歳 男児—

秋も終わりに近い頃、孫と鴻の峯にのぼった時の話である。突然、孫が「あっトンボ！」と言いながら、ギンヤンマをつまみあげ、そして叫んだ。「死んで

る！」まるで生きていたかのようなトンボを見ながら、「あのね、寒くなると虫は、みんな死んじゃうんだよ。」と言って聞かせる。「ふーん。みんな死んじゃうの……カワイソウ」と、今にも泣きそうな顔でつぶや



く。トンボが秋深くなれば死ぬことについて当然のことと思っていた私は、孫の言葉に不意をつかれた感じで「そうだよ。車につぶされると可愛そうだから、その草の上に、置いてやりなさいよ。」と言う。そして、その帰り道、孫がぼっそりとつぶやいた。「寒くなると、おじいちゃんも死んじゃうの?」

《聞いた人の一言》祖父

更に、道に散らばる蟬の死骸などを見て、幼いながらも「死」というものを、深刻に感じとったようである。

(4) 文法的な誤りや言葉の意味の認識の違いから起る表現

— 四歳 女児 —

S子「きょうは がっかりしてた」

母 「なにを がっかりしたの」

S子「だって図書の本を借りれなかったもの、お母さんががっかりして本を持って行くのをわすれたで

しょ」

母 「……? あっ、うっかりしてたね。あしたは持って行くから次の本借りようね」

《聞いた人の一言》母

うっかりとがっかりをまちがえたようだ。

(5) 大人の言葉を模倣した場合

— 五歳 女児 —

Y子が電話に出たときのことです。

「はい Yでございます……。」

はい 母がおります……。

いま かわりますので お待ちください。」

《聞いた人の一言》母

わたし、負けそう。よく聞いていますネ。

(6) 幼児の成長発達に喜びを感じた場合

— 四歳 男児 —

お手伝いする時(金魚のえさやり)

「どうしてぼくだけやらんといけないの」

「あーあ」と言いながらやっている

「まあいいか お兄ちゃんだから……」

《聞いた人の一言》母

自分が長女で「お姉さんだから」と意識することが多く、できるだけ上の子だからといってがまんさせたりプレッシャーをかけたりしたくないと思って育ててきたつもりだが、無意識のうちにお兄ちゃんだから我慢して頑張ってほしいということを期待しているのかもしれないと、反省させられた。それにしてもこの言葉はうれしく思う。本人が兄としての自信をつけてきたのかな。とても素直な言葉だった。

(7) 愛他心の育ちをうれしく思った場合

—四歳 女兒—

「おかあさん おなかの赤ちゃんもう六月だから生まれるよネ、私ネ、女の赤ちゃんのほうがいい。だってネ、私、女のおもちやしか持っていないから……おと

この赤ちゃんだったらおかあさんおもちや買ってあげてネ。女の子の赤ちゃんだったらおもちやも小さいころの服、靴、かしてあげるよ」

「そう そうおもっているの」

《聞いた人の一言》母

赤ちゃんが産まれることを知ると、子どもなりに考えたり興味をもったりでいろんな話が出ています。

(8) 幼児の発想や行動に感心した場合

—四歳 女兒—

待ちに待ったピアノのおさらい会が無事終わった時、祖母と話をしている

祖母「Eちゃん よくがんばったね」

E子「うん やったよ。ピアノをひいたあとの時おばあちゃんがいっぱい笑ってたね。」

祖母「おばあちゃん うれしかったよ。」

E子「おばあちゃんの白い頭がよく見えたよ。おばあちゃん E子もおばあちゃんになったらしろくくな

るの？ でも、E子はピンクがいいない。」

祖母「えー。」

《聞いた人の一言》母

この会話を聞いて思わず笑ってしまいました。祖母も嬉しいのかずっと笑いつ放し。愉快な一日でした。

右記のように、大人が時間に追われる生活の中で子どもの言葉に耳を傾け、たとえそれが間違った言葉遣いであっても、成長の過程としてすなおに受け止めたり、むしろ記録者の方が大人になって忘れかけていたものに気づかされたりしていることが分かります。

幼児の言葉をそのまま受け入れる家族の態度によって子どもも自信をもち、家族関係もまたよりよい方向へと進んでいるようです。

四 この活動をとおして得たもの

「聞いちゃった！」用紙の提出は、開始以来ほぼ毎日のように続いています。しかし、六か月経過時には提出者が片寄っていたり、提出していない親の中から「うちの子どもはおもしろいことをなにも言わないんですが……」といった相談があったり、「いっぱいありすぎて、書き忘れてしまう」という悩みも聞かれるなどの問題点も浮かび上がってきました。この活動の目的は、家庭で子どもの言葉に興味をもってもらうことですから、なるべく多くの親が参加してくれることを願っています。そこで、幼児理解のために話し合う機会をもったり、記録の工夫について意見交換をしたりしました。また、「聞いちゃった！」をまとめた、「子どものことば」集を発刊し、子どもをありのままに受け止めようとする親の意識を高めていきました。

実際に記録をつけた人々からは、様々な反応があり、この活動を通して幼児の言葉を聞くことが楽しくなったという声や、子どもの素晴らしさを発見す

ることが多くなったという感想などが聞かれるようになりました。また、幼児の言葉を正確に記憶しようとして子どもへの返事や対応が遅れてしまうことを反省している母親もみられました。さらに、この活動は幼児の心象風景を描いていることなので、その前段階として、幼児のこころのくみ取り方を勉強した方がよりよい記録を残せるのではないかなど積極的な意見も聞かれるようになりました。

この活動から、家族の和ができたり、子どものことばが、集を話題にして母親間の輪が広がったり、ご近所の方も読むのを楽しみになさるなどの副産物もたくさん産まれました。

これらのことを大切にしながらこれからも活動を継続していきたいと考えています。それは、いちばん身近な親が幼児の言葉に耳を傾けるようになることであり、会話が通い合い、コミュニケーションがうまくいくことで幼児の言語生活を望ましいものにしていくことが可能であると考えるからです。

幼児が何を思い、何を愛し、何を自分で選ぶのかという根源的なものを育てるため、目には見え難い幼児教育ですが、こうした地道な活動を大切にしていきたいと思っております。

(山口女子大学附属幼稚園・副園長)

参考文献

- 石川正一・国広勝代「幼児の言語的環境に関する研究
(2)―家庭との連携についての実践報告―」一九九三 幼児教育研究紀要 山口女子大学附属幼稚園